

ロベスピエールの墓穴発言

『『ロベスピエールの生涯 (The Life of Robespierre) 』の中でレニエは「1794年7月28日、ロベスピエールは国民公会の場で長い演説をおこない…超テロリスト集団に対する攻撃演説であり…全般的に非難する姿勢を示唆した。『今、この場であえて名を挙げることはしない。その非道さの深い謎を覆うペールを徹底的に引き裂くことはできないからだ。しかしこの陰謀を企む人々の中には、腐敗放埒さから成る組織、すなわちこの共和国の転覆のために外国人勢力によってつくられたあらゆる策略に最高の実権を握る人々の手下が含まれていると、私は確信している。つまり彼らは無神論及びその根底にある不道徳さという不純の使徒だと、私は考えている。』

レニエはさらに続ける—「このような発言をしなければ、彼はずっと勝者でいられただろうに」

ロベスピエールは革命の背後に存在するイルミナティの人々を暴き出すと示唆したことで、自ら墓穴を掘ることになった。」

上記は『カナンの呪い』213、4頁からの引用です。同書は続けて記します。

「ロベスピエールがギロチン台に送られた。ギロチンにかけられるまえ、有名な処刑人サムソンは、ロベスピエールの顎の包帯をおもむろにはずした。無情にも断頭刃が下ろされる瞬間まで、彼は屠殺される家畜のような悲鳴をあげていた。」

ルイ16世とマリー・アントワネットの死の瞬間とロベスピエールのその瞬間は全く異なったものでした。両極と言って良いほどです。ルイ16世とマリー・アントワネットの死はクシャトリアとしての死です。**ロベスピエールは使い魔小悪魔の屠殺だった**といえるでしょう。